高知大学男女共同参画推進室　しあわせぶんたん
NEWS LETTER
2022年3月 Vol.12

高知大学におけるダイバーシティ

高知大学学長　櫻井 克年

現在の大学生、大学院生世代（19－26歳）を「Ｚ世代」と呼ぶことがある。「Z世代」を含めて、「Y世代」（27－41歳）、「X世代」（42－56歳）、「X世代より上の世代」（57－69歳）に分けて日本経済新聞が行った、社会問題に関するアンケート結果が、昨年暮れに発表された。「Z世代」は、新しいテクノロジーに関心が高いだけでなく、「誰も排除されない」という考え方にも寛容的で、日本経済を前進させる推進力になると期待されている、と記されていた。

また、「Ｚ世代」の特徴の一つとして、国内、海外の課題を SDGsとの関連から見ることに既になじんでいることがあげられている。一例として、途上国の貧困の問題に対して、援助するという意識ではなく、自分たちの共通の問題と捉えるという意識があるとのことだ。また、プレゼンテーションスキルもすでに鍛えられてきており、SNSを通して社会に発信することも、実にスムーズにやってのける。スムーズすぎて勇み足になることもあるのだが。いずれにせよ、他の世代とは大違いである。

大学においてダイバーシティをどのようにとらえればよいのか？先のアンケート結果によると、「Z世代」と呼ばれる学生の現状認識には、それより高年齢の世代とは異なる視点が顕著に表れていた。年金問題、貧困問題、所得格差などは、他の世代と同様に高い関心を示しているが、4位から 7位には、人種差別、飢餓・栄養不足、ジェンダー不平等、LGBT差別の 4項目が並んでいる。他の世代ではこれらは 10位までに一つも含まれていない。その違いは歴然である。

私は「X世代より上の世代」の人間であるが、タイで長い間現地調査研究をしてきた経験を通して、LGBTが社会の中に普通に溶け込んでいる社会を見てきた。学校の中のトイレにも、男女の他にトランスジェンダーのためのトイレもある。それを日常的にみていると、特別なことではなくなってくる。「差別しない」というより、「そのまま受け入れる」ことこそが、ダイバーシティが活かされる社会の基本なのだと感じている。

高知大学におけるダイバーシティの意識はどうだろうか。男女共同参画については大学を挙げて取り組んできたこともあり、かなり浸透してきたものと考えているが、LGBTなどについてはあまり議論されてきていない。「そのまま受け入れる」ための意識改革と、具体的な行動を起こす時であると思う。

皆さん一人一人が当事者であることを意識していただき、積極的なご提案をいただきたいと思う。

高知大学におけるSOGIの多様性に関する基本方針 令和4年1月27日

高知大学は、「地域から世界へ　世界から地域へ」を標語に、人権を尊重し、国籍、性別、年齢及び障害の有無等による差別や偏見のない大学として、地域社会・国際社会の発展に寄与すべく取り組んでいます。

この観点から、本学では、多様な性的指向や性自認=SOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）への理解を深め、本学の学生・教職員等構成員のSOGIに関することがらに配慮するとともに、個人の意思・選択を尊重し、安全安心に修学・就労できる環境づくりを目指します。

【基本方針】

1. SOGIの多様性に関する理解を促進します。
2. SOGIを理由とする差別や偏見、ハラスメントを禁止します。
3. SOGIに関する個人情報の保護に努めます。
4. SOGIに関連する修学や就労上の合理的配慮を図ります。

「社会の多様性を考える―スポーツをきっかけに、人文社会科学の視角から―」

令和 4年 1月 18日、高知大学は「社会の多様性を考える」ための講演会をオンラインで開催しました（共催：人文社会科学部「ローンボウルズ人文社会科学プロジェクト」グループ及び、男女共同参画推進室）。講師に來田享子氏（中京大学スポーツ科学部教授、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会・理事）をお迎えし、「多様性をめざす近代オリンピックの歩みと展望」を演題にご講演いただきました。

來田先生のご専門はスポーツ史、スポーツとジェンダーであり、冒頭その視点からオリンピックの歴史を振り返りました。当初のスポーツは「リーダーの資質を形成するエリート教育のツール」と位置付けられ、オリンピックも男性を基準とした制度になっていたそうです。やがて、教育的効果が認められ、性別を問わずにスポーツをするようになったものの、当時の「スポーツの公平と平等」の観点から、競技は性別を区別して実施されるようになったようです。

今回のオリンピックでは、トランスジェンダー選手が注目されました。参加選手のダイバーシティを何の基準で測定するかということは一つの課題です。現在は選手の血中テストステロンが基準値（第二次性徴期前男性の値）であることが判断に採用されていますが、課題もあるようです。

さて、ジェンダーとスポーツの歴史を振り返ると、国際女子スポーツ連盟が設立されたのが 1921年、それからちょうど 100年の節目が今回の東京オリンピックであったことから、來田先生はもっとジェンダーとスポーツについて発信したかったと振り返りました。講演会の参加者からは、部活動でスポーツに取り組んでいる学生からの質問の他に、スポーツはやっていないが女性選手のメディアでの取り上げられ方について等、多くの質問が寄せられました。

今回の講演会は新型コロナ対策から急きょ完全オンラインでの開催となりましたが、学生・教職員合わせて 70名が参加し、質疑が飛び交うとても活発な講演会となりました。

女性活躍推進セミナー「ジェンダー格差を生む心のしくみ」

令和3年10月28日に女性活躍推進セミナー「ジェンダー格差を生む心のしくみ」をオンラインにより開催し、小島優子准教授担当の「男女共同参画の哲学」履修生の他、教職員も含めて65人が参加しました。講師は広島大学大学院人間社会科学研究科の森永康子教授で、社会心理学の観点からジェンダー・バイアスについて講演していただきました。

私たちは誰でもジェンダー・ステレオタイプを持っています。つまり、誰でも偏見をもち差別をする可能性があります。このため、女性がステレオタイプを違反することへの罰として、二つのバックラッシュ効果があります。第1のハードルは、同じレベルの能力では、男性に負けることです。採用や昇進場面で同一の履歴書などを使う実験的研究では、女性の方が採用可能性が低いという結果が生じています。第2のハードルは、強引さや支配性は女性にとって禁止的なステレオタイプなので、第1のハードルを乗り越えた女性や権力志向の女性は「仕事はできるけど、イヤな女だよね」と嫌われることです。

また、「子育ては大変だから、小さい子がいる女性には仕事をあまり振らないようにしよう」という考えは、根底に「女性は能力が低い」とみなすステレオタイプがある「好意的性差別主義」であり、その結果、女性が仕事を学ぶ機会を奪われて意欲を失うという悪影響が指摘されました。

ステレオタイプは完全に無くすことはできないので、自分はステレオタイプを持っているということを自覚して、社会の中で自分の振る舞いを行っていくこと、また制度を変えていくことが大事であるというお話をしていただきました。無意識のバイアスの研究知見を活用して、性別が評価に影響しないようにすること、男性中心的な評価基準を変えることなどが挙げられました。

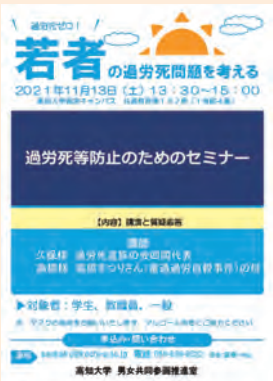
参加者からは、全員から「とても良かった」・「良かった」という回答が得られ、大変ためになるセミナーでした。

過労死等防止のためのセミナー

令和3年11月13日、高知大学朝倉キャンパスにて、愛媛大学名誉教授の長井偉訓先生、過労死遺族の会四国代表の久保様、そして電通過労死事件の高橋まつりさんのお母様をお招きして「過労死等防止のためのセミナー」を開催しました。セミナーには学生、教職員、一般の方を合わせて 23名が参加しました。

対面方式で行われたセミナーでは、講師が言葉を詰まらせる場面もあり、遺族の悲しみに終わりはないとの言葉に参加者も真剣な表情で聞き入っていました。

これから就職活動を始める学生、経営学を学ぶ学生、学生を支える教職員、それぞれの関心や立場から質問が寄せられました。セミナー終了後には追加の質疑の時間が設けられ、学生から寄せられた質問に対して講師の皆さんは誠実に応じてくださいました。



ロールモデル講演会「出会い・共感・協働～フィリピンでのボランティアをつうじて得た視点～」

令和3年6月7日、吉村綾乃氏（高知県国際交流協会職員、2017-2 JICA協力隊フィリピン派遣・コミュニティ開発）をお招きし、ロールモデル講演会「出会い・共感・協働～フィリピンでのボランティアをつうじて得た視点～」を開催しました。

吉村さんは高知県出身、土佐女子中高校から香川大学農学部に進学し、その研究室で出会ったエチオピア出身の研究生との交流から国際協力への関心が高まったそうです。大学卒業後、JICA協力隊員（コミュニティ開発）としてフィリピンに派遣されると、思っていた以上に上手くいかない活動に悩んだそうです。

そこで、意識して取り組んだことは、出来る限り現地の人と衣食住をともにすること、とにかく彼らと一緒に過ごし、彼らのことを学び、行動を真似てみる。そうすることで、現地の人たちとのコミュニケーションの機会が増え、本音を聞かせてもらえるようになりました。そのほか、ボランティアである自分のことも知ってもらえるように、友人たちと協力して日本文化紹介のイベントなども効果があったそうです。浴衣を着ての盆踊りや書道、折り紙などを通じて、多くの人と交流する機会を持ちました。

また、JICA協力隊を終えて、高知に帰ってきたときに、フィリピンに行く前以上に日本や地域の課題に目が向くようになりました。そして、現在は高知県国際交流協会で職員として働きながら、高知県と外国の人々をつなぎ、高知県の国際交流の課題に取り組んでいます。

ロールモデル講演会「功利主義と現代」

令和4年1月11日にロールモデル講演会を開催しました。男女共同参画推進室主催、大学院黒潮圏総合科学専攻共催によるDCセミナーとして開催し、小島優子准教授担当「現代思想論」受講生ほか、高知大学教職員計58人が参加しました。

講師の奥野（中野）満里子先生は、Assistant Professor (Bioethics), The University of Alabama at Birmingham School of Medicine、アラバマ州ゲノム健康プロジェクト生命倫理部門長、UABプレシジョン・メディシン研究所倫理顧問を務めています。アメリカで活躍する女性研究者に功利主義と現代について最新の研究状況をうかがいました。

功利主義の考え方は、「道徳的に正しい行為とは、とりうる行為の選択肢のなかで、直接的・間接的に影響を受ける全ての人たちに、全体として最大限の善をもたらすような行為である」というものです。奥野先生の専門であるヘアの「二層型功利主義」の理論など、功利主義の考え方を講演していただきました。ヘアによれば、「嘘をつくな」などの一般的な規則に従う「直観のレベル」と、常識的な規則や直観で判断がつかないディレンマ事例で「これは誰の幸福のためになるのか？」を問う「批判のレベル」の二つのレベルのどちらにも功利主義は使うことができます。

現代医療のなかで、例えば、結合双生児の分離手術のようなディレンマが生じた際に、功利主義は「いったい誰の幸せのためにやってるの？」というシンプルな切り口を提供することができます。しかし、私たち人間は不完全なので結果予測は間違っているかもしれないので、対話や議論が必要となってきます。参加者アンケートでは、全員が「とても良かった」・「良かった」と回答し、たいへん満足度の高い講演会でした。学生からは、外国の教員の講義をリアルタイムで聞き、教員同士のディスカッションが興味深かった、自分が生きていく際に功利主義の考え方を心に留めておこうと思った、という感想がありました。

男女共同参画支援ステーション　オンラインセミナー「高知大学の育児と介護制度」について

男女共同参画支援ステーションでは、令和3年6月10日から「高知大学における育児と介護制度について」のオンライン動画を、moodle shareで公開し、高知大学教職員27人が視聴しました。男女共同参画支援ステーション長の小島優子が講師を務めて高知大学の制度について解説しました。

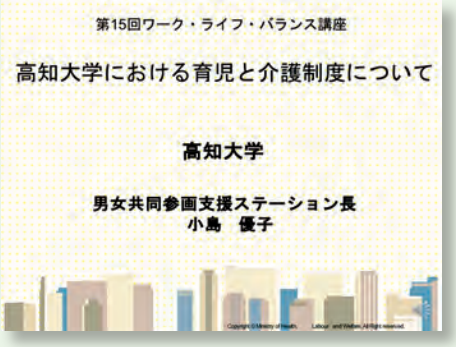
第1部の育児休業制度では、常勤職員の男性は妻の出産の時に2日、また出産前8週間から出産後8週間に5日の休暇が取得できることを案内しました。高知大学では、2020年度には8人の男性教職員が育児休業を取得しています。育児休業は夫婦ともに取得できること、育児休業中に支給される育児休業給付金は所得税・社会保険料・雇用保険料が免除されるため、手取り金額の約 8割になることを説明しました。

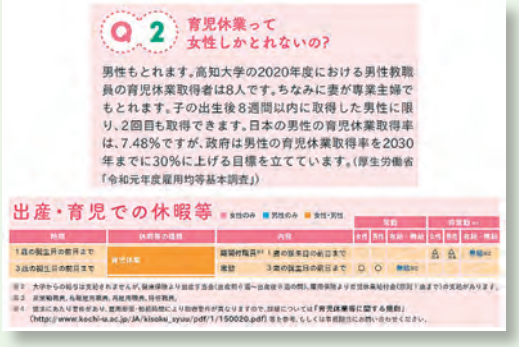
第2部の仕事と介護の両立では、介護休業は、対象家族1人につき介護を必要とする継続状況ごとに3回取得できること、介護を自分も直面する課題として捉え、介護に直面しても離職せずに働き続けることが肝要であることを解説しました。

視聴者からは以下の感想がありました。

「育休や介護など、自分自身が当事者になった場合の制度等の情報について知ることができました。加えて、いつも通りが送れないことに対して、周りがどのようにサポートするかを考えるきっかけになったと思います。最近身に染みて思うのですが、生活も、教育も、研究も、なにかと「デジタル」な“モノ・コト”へ変化することが義務のような雰囲気になりつつあります。こんな時代だからこそ、自分自身の周りにある相手や環境に対する感謝や労りの気持ちのような、アナログな部分の成長や充実が大事だと感じています。

気づきと共感がうまく循環するようなセミナーや取り組みを今後とも期待しております。」





『仕事とプライベートのハーモニー』のご紹介

令和3年3月に「仕事とプライベートのハーモニー」の改訂版を作成して高知大学教職員に配布を行いました。高知大学の育児制度と介護制度について、Q&A方式で分かりやすく解説しています。

男女共同参画支援ステーション　相談コーナーのご案内

男女共同参画支援ステーション相談コーナーは、高知大学の学内の皆様の相談コーナーです。これまで育児休業を取得した大学教員のうち67%の方に対して、育児・介護と研究の両立相談の対応を行ってきました（2016～2020年度実績、朝倉・物部キャンパス）。相談のお申込みは、男女共同参画支援ステーションのホームページをご覧ください。http://www.kochi-u.ac.jp/sankaku/station/consultation.html

男女共同参画支援ステーション相談コーナーを利用して

土屋京子准教授　人文社会科学系人文社会科学部門

第一子で取得した育児休業から復職する目前の2019年8月、すでに自宅周辺や大学のある朝倉地区では保育園の空きがありませんでした。市の保育幼稚園課に直接相談しても、HPに記載されていることがすべて。そんな折、男女共同参画支援ステーションから、企業主導型保育園として高知大学と提携しているふくのたね保育園を紹介してもらいました。その頃には保活に疲れ、半ば復職を諦めていたのですが、園に到着したときに、炊事室から出汁の香りが優しく漂ってきて、なんだか自然とほっこりしたのを今でも思い出します。

保育園に預けるのは親子ともにストレスのかかることですが、ふくのたねさんは私も娘も安心できる、居心地のいいところでした。毎日、一日の終わりにはアプリを通じて、その日、子どもを一番見てくれた先生から数枚の写真付きでお便りが配信されるのですが、県外にいる両親もそれを楽しみにしていました。リトミックや英語は専門の先生がいらっしゃり、その活動や行事の様子はコロナ禍においてネット配信されるなど、様々に工夫を凝らし、利用者に寄り添った保育をされています。その後、二歳になった娘は転園してしまいましたが、第二子出産後の産後ヨガやベビーマッサージで今も先生や園とご縁が続いています。

企業主導型保育ふくのたね保育園のご紹介

男女共同参画支援ステーションより

令和3年4月16日に男女共同参画支援ステーション長の小島がふくのたね保育園旭に見学へ伺い、木村園長と北山副園長にお話をうかがいました。

高知大学は、ふくのたね保育園と企業主導型保育契約を結んでいるので、高知大学職員は定員のうち従業員枠を利用することができます。保育対象は生後6ヶ月～2歳児、開園時間は7時から20時までです。半年前から入園の予約を受け付けています。

ふくのたね保育園の久万と薊野には病児保育室が各2室、ふくのたね保育園旭には体調不良児対応型保育が併設されています。このため、病気になった時にもお子さんを預けることができます。

布団を持参する必要はないので毎日の荷物は少量で済みます。保育の様子は、お子さんの写真 3枚と給食の写真 1枚つけて、毎日保護者に送っています。保育室全てにビデオを設置して、毎日の保育の様子は録画してお子さんの安全を確認しています。ビデオの録画を、保護者はいつでも視聴することができるので安心です。

男女共同参画支援ステーション相談コーナーを利用して

古閑 恭子教授　人文社会科学系人文社会科学部門

第二子出産後、研究会などから足が遠のいていましたが、オンライン化で自宅から参加できるようになり、むしろ機会が増えました。一方で、オンラインとはいえ幼児をそばにおいての業務には限界があることもわかってきました。パソコンと私の間にすぐ割り込んでくるし、しまいにはノートパソコンを閉じてしまったことも。内輪の会議ではそんなハプニングも笑顔で受け入れてもらえますが、そうはいかないこともあります。

夜間オンライン講座担当の話をいただいた時、研究成果の還元にもなるとすぐに引き受けたのですが、開講を目前に控えたある日、やはり子供をそばに置いてできる仕事ではないと思いました。市がやっているファミリーサポート制度はボランティア制なので確実ではないし、民間の託児はかなりの費用が生じてしまいます。悩んでいた時、男女共同参画支援ステーションの小島先生が相談に乗ってくださり、大学を通してムッターシューレさんにお願いできることになりました。

この1月の大学入学共通テスト監督業務の際には、学内施設に設けられた託児室で、朝から晩まで預かっていただきました。実はうっかりしていて申し込み期限を過ぎていたのですが、相談コーナーに連絡したところすぐに手配くださいました。食事、おやつもお任せできて、本当に助かりました。子供が小さいうちは思うようにいかないことばかりですが、このような支援、相談できる場所があるおかげで、ワンオペでも仕事と育児の両立を何とかはかることができています。

男女共同参画支援ステーション相談コーナーを利用して

岩佐 光弘准教授　人文社会科学系人文社会科学部門

今からちょうど3年前の2017年11月のこと。第一子の出産を控え、育休についての情報を集めていた私の目に「パパ休暇」という文字が飛び込んできました。条件付きですが、2回に分けて育休を取得できるということに興味をもち、いろいろと調べてみました。しかしながら、2017年10月の法改正によってできたばかりだったということもあり、この制度がどのようなものかを当時の私はあまりよく理解できずにいました。

そんなとき、ふと思いたって、男女共同参画支援ステーションに行ってみました。突然の訪問にも関わらず小島先生が丁寧に対応してくれ、その後、パパ休暇についての情報をメールでもお知らせくださいました。いろいろ検討した結果、結局はパパ休暇を取らず、一度の育休取得となったのですが、小島先生の情報提供のおかげで、育休取得の計画をしっかりと練ることができたと思います。

科研費による託児費用の支出等のご案内

男女共同参画支援ステーション
からのお知らせ

- 科研費の直接経費で学会大会参加時の託児費用を支払うことができます（日常的に必要な費用を除く）。
- 産休・育休により前年度の科研費に申請できなかった場合は「研究活動スタート支援」種目に応募することができます。※例年 3月上旬～5月上旬にて公募

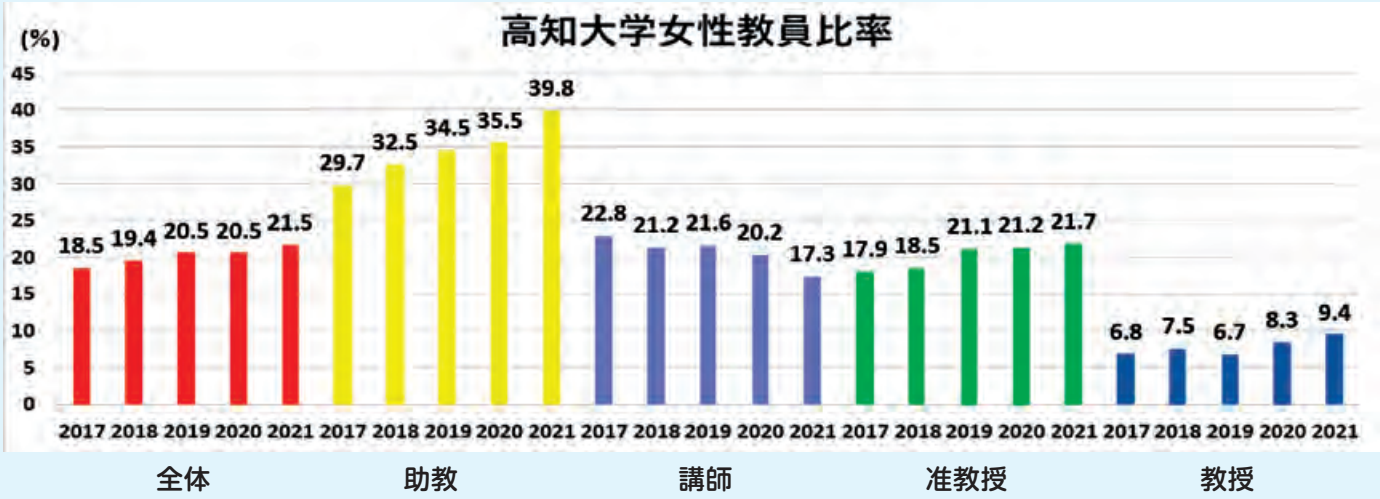
※詳細は研究推進課研究推進係（TEL:088-844-8892,8891, E-Mail: kk03@kochi-u.ac.jp）、医学部の方は総務企画課研究推進室（TEL:088-880-2226, E-Mail: is22@kochi-u.ac.jp）までお問い合わせください。

文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」事業のご紹介（2018～2023年度）

代表機関　　／ 徳島大学
共同実施機関 ／ 香川大学・愛媛大学・高知大学・鳴門教育大学・徳島県立工業技術センター
徳島県立農林水産総合技術支援センター・アオイ電子株式会社・協和株式会社

3つの目標

目標 1：研究力の向上を図り、優れた研究成果の創出につなげ、女性研究者の活躍の場を広げる。
目標 2：女性研究者の増加及び上位職への登用を推進する。
目標 3：研究と生活の調和を図る。



行動計画

Project.1　女性研究者が牽引する地域創成イノベーションリサーチシーズの形成

1 ダイバーシティ推進共同研究制度を構築し、女性研究者が牽引する地域創生イノベーションシーズを形成するための基盤整備を行う
2 研究費獲得から研究遂行に向けて挑戦するための支援を展開する
3 女性研究者雇用の場の拡大をはかる
4 共同顕彰制度により、研究のモチベーションを高める

Project.2　ハイ・ポテンシャル人材育成

1 女性研究者の在職比率、採用比率を上げる
2 女性の上位職への積極的登用を推進する
3 役員及び管理職への登用を推進する
4 女性リーダーを育成する

Project.3　研究と生活の調和

1 各共同実施機関で取組んでいるライフイベント及びワーク・ライフ・バランスに配慮した支援を展開する
2 四国デュアル・キャリア・システム（夫婦帯同制度）を構築する
3 キャリア形成実現・復帰・復職に向けた支援を展開する
4 治療と仕事の両立支援を展開する

高知大学における支援制度の採択件数

	2018	2019	2020	2021
ダイバーシティ推進共同研究支援制度	1	4	5	2
ライフイベントからの復職支援制度	1	2	2	3
国際学術論文投稿支援制度	–	3	5	3
女性研究者奨励賞	–	1	1	0

ダイバーシティ推進共同研究支援制度

本事業では、女性研究者が研究代表者として取り組む共同研究に対して助成を行います。女性研究者のリサーチマインドを高め、地域や社会の問題・課題解決につながる優れた研究成果の持続的創出をはかることを目的とします。

2021年度　研究代表者および研究テーマ一覧

2021年度支援金額　第一期：20万円、第二期：50万円

・高橋由子特任助教　学生総合支援センター
　研究課題「修学上支援が必要な大学生に対する合理的配慮と授業のユニバーサルデザイン化Tipsの開発」

・越智里香助教　総合科学系複合領域科学部門
　研究課題「加水分解酵素に応答して色調変化を示す超分子ヒドロゲルセンサの開発」

2021年度　ダイバーシティ推進共同研究表彰制度

宮井千惠理事と越智里香助教

この表彰制度は文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」で実施する「ダイバーシティ推進共同研究プロジェクト」で優れた功績を残された代表研究者に同制度の責任者である徳島大学長が授与するものです。

受賞者の越智里香助教（総合科学系複合領域科学部門）は、研究課題「生体分子に応答して色調変化を示す超分子ヒドロゲルセンサの開発」に2019年度から2020年度に取り組み、糖リン酸化酵素に応答性を示す超分子ヒドロゲルの開発に成功しました。

ライフイベントからの復職支援制度利用者一覧

過去2年度以内に、ライフイベント（妊娠、出産、育児、介護）のため、休業又は産前・産後休暇、もしくはその両方により、3か月以上やむを得ず研究活動を中断した方の研究を支援します。

2021年度支援金額　5万円～10万円

2021年度　採択者

・関良子准教授　人文社会科学系人文社会科学部門
　研究課題「高知に所縁のある日系カナダ人二世ロイ・キヨオカによる母親の伝記の研究」

・橋田裕美子助教　医療学系基礎医学部門
　研究課題「皮膚指向性ウイルスの感染状況の解明と疾患との関連性の探索」

・王飛霏助教　医療学系基礎医学部門
　研究課題「ヒト臍帯血による脳性麻痺治療の神経新生メカニズムの解明」

国際学術論文投稿支援制度利用者一覧

女性研究者の研究力向上、および女性研究リーダー育成のために、外国語論文を執筆する女性研究者に、投稿費または校閲費の補助を行う制度です。

2021年度支援金額　5万円　※応募人数によって調整

2021年度　採択者

・渡邊ひとみ准教授　人文社会科学系人文社会科学部門
・笹部衣里講師　医療学系臨床医学部門
・南まりな特任研究員　医学部環境医学教室

共通教育科目「男女共同参画社会を考える」

令和 3年 9月 21日から 25日に、「男女共同参画社会を考える」リレー講義をオンラインで開催し、92人が履修しました。男女共同参画社会について、日本社会の現実的課題を通じて、法学・ジェンダー論・家族論・哲学・社会学など人文社会科学の多様な観点から学びます。

第 1日目 (9/21)

第一回　ガイダンス「男女共同参画社会とは何か」 小島優子（安全・安心機構）
第二回「男女共同参画とワークライフバランス」 宮井千恵理事（ワークライフバランス担当）
第三回「育児休業について考えてみよう」
宮木 公平氏（中小企業診断士・社会保険労務士 Office Miya-Line 代表）
芦田 崇氏（第 15回イクメンの星）

第 2日目 (9/22)

第四回「憲法で学ぶ男女共同参画」　藤本富一（教育学部）
第五回「世界に学ぶ男女共同参画」　中川香代（人文社会科学部）
第六回「育児から見た男女共同参画」　岩佐和幸（人文社会科学部）

第 3日目 (9/23)

第七回　キャリアセミナー 協力：こうち男女共同参画センター　ソーレ
児美川孝一郎氏（法政大学）
第八回　ロールモデル講演
第九回　キャリアワークショップ

第 4日 (9/24)

第十回　「家族から見た男女共同参画」 森田 美佐（教育学部）
第十一回　「大学のなかの男女共同参画」 廣瀬 淳一（安全・安心機構）
第十二回　デート DVセミナー　協力：こうち男女共同参画センター　ソーレ
原健一氏　NPO法人DV対策・予防センター九州理事長

第 5日 (9/25)

第十三回　「地域における男女共同参画」 佐藤 洋子（地域協働学部）
第十四回　「生殖医療と男女共同参画」　小島 優子（安全・安心機構）
第十五回　「過労死に関する講演会」　長井 偉訓 氏（愛媛大学名誉教授）
高橋 幸美 氏（広告代理店過労死ご遺族）
久保 直純 氏（四国過労死等を考える家族の会 代表）

育児休業を考えるセミナー

厚生労働省が推進する「男性の育児休業取得促進」活動の一環として、東京海上ディーアール株式会社が厚生労働省から委託されたセミナーを、本学の講義に組み込んで実施する取組が、令和 3年 9月 21日にオンラインで行われました。

セミナーの前半では特定社会保険労務士の宮木公平氏に、1. 男性の育児休業現状と課題、2. 育児休業制度、3. 育児休業推進企業、4. 男性の育児休業の効果とメリットについてお話していただきました。後半では、「第15回イクメンの星」に選ばれた芦田崇氏に、四人の子育てと育児休業の経験とそこから得られたものについてお話いただきました。

学生からは、男性の家庭進出への意識に欠ける人への意識改革をどのように行ってきたかという質問がありました。それに対して芦田氏は、自分の業務についてマニュアルを作成して他の人に引継ぎをするなど実務上での義務も欠かさないことによって、円満に育児休業を取得できるようになったという回答がありました。「権利」を主張するだけでなく、「義務」を果たすことにより職場で育児休業を取得しやすい環境がつくられ、後輩たちが育児休業を取得しやすい雰囲気になったそうです。また、育児は楽しんで、時にはリラックスして自分の負担にならない程度にパートナーと分業して取り組むことが必要だというお話をしていただきました。

男女平等という学問を学ぶと同時に、育児休業について知ることによって学生は実生活に役立つ知識を習得することができました。欧米と比較しても日本の育児休業制度自体はしっかり作られているにもかかわらず、日本の育児休業取得率が低い現状について理解し、個人の意識改革や職場での環境整備について学生が自分の課題として考えることができました。

デートDVセミナー

こうち男女共同参画センター　ソーレ協力のもと、学生を対象とした「デートDVセミナー」が、令和 3年 9月 24日にオンラインで行われました。講師は、NPO「DV対策・予防センター九州」理事長の原健一先生です。

DV（ドメスティック・バイオレンス）未然防止教育として、相手とより良い対等な関係をつくるために、デートDVの実態や若者にありがちな恋愛観、相談を受けた時の対応などについて講演していただきました。交際相手からの束縛がエスカレートすると交友関係が狭くなって相手を傷つける可能性があること、交際相手とは対等な関係を築くことが大切であることをお話いただきました。対等な関係を築くためには、好きになった人を尊敬すること、自分を大切にすることが大事であることを学生は学ぶことができました。

学生にとっては身近な問題であるために、友人から相談を受けた時の対応など学生からは多くの質問が出されました。参加者アンケートでは、98%が「よく分かった」・「まあ分かった」、これからのふるまいに活かすことが「できる」・「たぶんできる」と回答しており、デートDV未然防止教育として非常に効果の高いセミナーとなりました。

キャリアセミナー

令和3年9月23日、こうち男女共同参画センター「ソーレ」との共催で「大学生向けキャリア形成支援のセミナー」をオンライン同期型で実施しました。第1部では講師に児美川孝一郎氏（法政大学キャリアデザイン学部教授）をお迎えし、「就活の前に職業人生を考える」と題する講演が行われました。

児美川先生からは、不確実性が高まる社会で、自分の軸を持ちながら行動を選択するには、その判断材料となる情報の収集・分析力が必要。

それでも、次の経済危機やパンデミックも含め、自分の能力を超えた社会的な出来事も起こる。自分で泳ぐところ、浮かんで待つところ、ドリフト（流されるところ）を使い分け、局面を乗りきる体力の使い方、仕切り直すレジリエンスの大切さについて学びました。第2部は学生にとって人生の先輩となるロールモデル3組（漢方薬局を経営：金子絵里子さん・彰さん夫妻、津野町地域おこし協力隊：蛭田彩人さん、コニカミノルタ QOLソリューションズ株式会社：吉田明子さん）にそれぞれのキャリアについて講演いただきました。第3部では、大学教育創造センターの杉田郁代先生がファシリテータとして加わり、オンラインでのグループワークを行い、講演会を聴いての感想や意見を交換しました。参加学生からは、コロナ禍で人と話をする機会が減り、また普段から学生同士でキャリアについて話し合う機会もないことから、とても有意義な時間だったとの感想が多く寄せられました。

「男女共同参画社会を考える」授業　令和3年度履修生からの感想

高知大学では、平成 24年度から共通教育科目「男女共同参画社会を考える」を開講しています。令和 3年度共通教育科目「男女共同参画社会を考える」の授業では、学生から以下の感想がありました。学生からは、社会の潮流に合わせて必修化したほうがよいくらい学ぶことの多い講義であるという声があがりました。

・短期間だったが、集中して学べたのが逆に良かったし、教職をとらない学生にももっと広まってほしいので、共通教育ではなく全学部必修にしてもらいたいくらい興味深いし学ぶことが多い講義だと思う。

・全ての回の課題に取り組むことで各々の回に対する理解がかなり深まった。今まで知らなかったジェンダー平等、労働問題等について具体的に知ることができたので、今後の生活の大きな糧になるだろう。本講義の内容は是非、高校の段階で知っておくべき内容だと感じた。大学でも今後の時代の潮流に合わせて必修にしてほしいとさえ思った。

・この授業を受講して、男女共同参画社会を実現することはとても重要なことであると思いました。また、男女共同参画は私たちにも関係することなので自分事として考えなくてはならないと思いました。また、性別による役割の固定観念をなくしていくことが、男女共同参画社会を実現するために重要であると思い、性別による役割の固定観念をなくしていけるように周りの人に呼びかけようと思いました。

・男女共同参画やその取り組みついて理解を深められたのでとても有意義な授業でした。男としての女性差別への向き合い方を学べたのが個人的に良かったと感じています。また、ロールモデルの方の講演は男女共同参画に限らずとても参考になりました。

・様々な専門分野の先生方の男女共同参画に関するお話をオムニバス形式で聞くことができ、多角的に男女共同参画社会について知識をつけることができたと感じています。

・全力で取り組めなかったことが多い自分の人生でやりたいことに全力で取り組むと周りが答えてくれることがあるということがわかりました。

・たくさんの人の話を聞いて、いろんな視点からの考え方を知ることができ、とても勉強になった。社会に出たときにはこの講義で得た知識で偏った考えを持たず、多角的な視点で物事を考えられる人になりたいと思った。

・本講義を受けることによって、普段あまり意識をしていなくて見えていなかったところも考えることができたため、受講してよかったと感じている。男女共同参画社会の実現に向けて、日常の意識から変えていければなと考えている。

・日本の男女不平等がいかに深刻なのかがわかり、そこからどうすれば女性差別をなくせるのかについて深く考えることができた。また過労死や DV、ワークライフバランスなど、社会に出る上で知っておかなければいけない知識についても新たな学びが多くあった。この授業で学んだことは社会に出た時、また自分の家族を持った時に役立てたい。

・男女共同参画について、簡単なことしか今までは知らなかったが、男性の育児休業についてや、デート DV、世界規模の男女共同参画など、様々な分野について学ぶことができて良かった。

・さまざまな問題について、自分の人生をかけて闘っている人たちの話を聞いて一生懸命何かに取り組むことの大切さを学んだ 。

〒780-8520　高知市曙町二丁目 5番 1号　高知大学男女共同参画推進室
TEL: 088-888-8022　FAX: 088-888-8023　E-MAIL: sankaku@kochi-u.ac.jp